

KFCと尚絅学院大がつくる名取のメディア

ハナモモ通信

2018年 9月



ハナモモちゃん

【発行】
河北新報普及センター
【協力】
尚絅学院大 河北仙阪
【エリア】
名取市内
【部数】
11,600部
【電話】
022(266)2991

学生の若い力が協力 「名取復興文化祭」開催

1日、今年で6回目となる「名取復興文化祭2018」(名取市サポートセンター)と・なとり(JOCA)主催、尚絅学院大エクステンションセンター共催)が名取市文化会館でおこなわれました。

復興文化祭は被災された方々と地域の方々、支援者みんなで作り上げる文化祭

19団体の歌や踊りの発表や手作り作品の展示がありました。

復興文化祭は尚絅学院大・仙台大・兵庫県の流通科学大の学生ボランティアが協力し運営をサポートしました。

当日、午前9時過ぎから行われた全体ミーティングでと・なとり代表の菊



関上大漁太鼓 (右端が赤間さん)



全体ミーティングの様子

地麻理子さんは「参加者が1年かけて準備した発表の場です。みんなが輝けるようサポートをお願いします」と挨拶しました。

昨年、1人で参加した流通科学大3年の阿久澤草太さんは、イベントの楽しさを他のメンバーとも共有したいと思い今年にはボランティアサークルのメンバーを引き連れ総勢11人で参加。イベントの印象について「各団体の発表だけでなく、参加者から見える地域の繋がりが魅力のひとつです。今後も引き続き協力して自分達も他学や地域の交流を深めていきたい」と話してくれました。

友人の紹介で昨年に続き参加した仙台大3年の増井大悟さんは「各々の文化芸術を見てもらい、後世に残すことができる貴重な行事。学生にとって、演者の

方々と世代を超えたコミュニケーションを取ることで、他学の学生と交流する良い機会になっている」と感想を話しました。

尚絅学院大連携交流課長の佐々木真理さんは「震災から約7年半が経過しても、復興公営住宅等でのコミュニティ再生など復興を目指している地域には、まだまだたくさん課題があります。これからもいろいろな形で皆さんの力を活かしてもらえればと思います」と願いを語りました。



名取おぼこ (右端が赤間さん)

開演を飾った「関上大漁太鼓保存会」と「名取おぼこ」で迫力ある太鼓と、唄を披露した赤間弘子さんは「グループで活動することはとても楽しい。震災の影響でメンバーの入れ替えもあったが、これからも元気にがんばっていききたい」と笑顔で話しました。

(石幡快、後藤香菜子、島田千緩、逸見彩絵)

地域の歴史学ぶ

「ゆりが丘歴史ヒストリア」

14日、ゆりが丘公民館で「ゆりが丘歴史ヒストリア」が開催されました。

住民が名取の歴史を学ぶことで、地元への関心を高めることを目的とし、講師にゆりが丘在住で郷土の歴史に詳しい鈴木次郎さん(79)を迎えて行われました。講座は今年で4年目となり、リピーターを含め21名の方が参加しました。

今回のテーマは「江戸時代に発達した奥州街道」、講座の前半では東京から名取までの奥州街道沿いの名所が紹介されました。松尾芭蕉の旅のエピソードと照らし合わせた説明で、分かりやすく街道の歴史を学びました。後半では、名取の歴史文化遺産について紹介があり、神社仏閣や増田の宿場町に関する説明を参加者の方々は熱心に聞き入っていました。

10月には「名取の熊野三社探訪」と題し、下余田の熊野三社、高館の熊野三社を実際に歩く「移動研修」が開かれる予定で、受講者は次回の講座を楽しみにしていました。

受講された片山幸子さん(72)は「自分では大まかに



しか分かっていなかった名取やその周辺の歴史を、奥州街道を通して詳しく身近に知ることが出来て良かったです。熊野三社の踏査が楽しみです」と話しました。

講師の鈴木さんは「ゆりが丘には、名取以外の街から転居して来た方が多く、今住んでいる名取の歴史を知らない方もいる。そのような方々に地元のことを知ってもらって、親しみを感じてもらいたい」と話しています。

(星野裕太)

自然豊かな高館山

子どもたちのびのび遊ぶ

中学生3人が結成した「遊びマーゲル(意味・遊びまくる)」による、「高館山チャレンジ」(協力・子どもの助手 塩田大介、一般社団法人プレーワーカーズ、後援・名取市教育委員会、名取市立第二中学校)が22日、高館山いこいの広場で子どもたち15人が参加

して開催されました。この企画は子ども向け助成金事業、西松建設まちづくり基金「なとりこどもファンド」による取り組み。子どもたちが自分たちで考えたまちづくりのアイデアを公開審査会で発表し、獲得した助成金を使って、実際に活動するものです。



当日、雨の降る午前中はブルーシートで屋根を張りサバイバルゲームで使用する「盾」を作成、その後天候も回復し子どもたちは元気に高館山で遊びを楽しみました。

遊びマーゲルの須永睦君、大久保龍人君、阿部菜々巴さん(名取二中2年)は、今回初めてのプレゼンやPRのための「なとらじ801」への出演など、大人との関りをたくさん持てたそうです。

2人の子どもが参加した保護者の若林さんは「イベントは学校からのパンフレットで知りました。外遊びが大好きでキャンプなどにもよく連れていきます。2人とも楽しそうに遊んでい

て参加してよかったです」と笑顔で話してくれました。

参加者の若林慧人君(10)は「高館山でこのように遊んだのは初めて、みんなでする水鉄砲遊びはとても楽しい。また参加したい」と話しました。

リーダーの須永睦君は「今回は、小学5年から中学3年を対象に参加者を募集し、多くの子どもたちが集まってくれました。このイベントで自然豊かな高館山の魅力を知ってもらうとともに参加した子どもたちにも自主性やリーダーシップを育んでほしい」と話してくれました。(遠藤正隆)



日本の文化次世代へ

着付け作法学ぶ

21日、名取市立第一中学校で1年生33人を対象とした着物の着付け体験授業が開催されました。

次世代に着物文化を伝えようと活動する名取市の市民団体「結(むすび)の会」が協力。講師7人が家庭科の授業としておこないました。

最初に、結の会代表の佐藤恵美子さんが、男女の着付けの違いなどを講話、生徒は普段聞き慣れない着物のルールについて興味深そうに聞いていました。男女に分かれての着付けの実習では、浴衣の着方から帯の巻き方まで、段階を追って丁寧に説明していましたが、生徒たちは大苦戦。特に帯の巻き方では、自分で



着ようと頑張る生徒もいましたが、講師が付いてくれないと正しく巻けない様子でした。

何とか着た浴衣姿を照れながらも嬉しそうに生徒同士で見せ合っていました。

授業は浴衣を着て終わりではなく、あいさつや作法の講話もありました。正座になってのあいさつでは「男性は自分の肩幅で手をつけておじぎをします」など、男女であいさつの仕方が違うことを説明。他にも頭の下げ方でありさつの丁寧さが変わることを教わった上で、生徒は実際におじぎの練習をしていました。浴衣を着たままの記念

撮影もあり、生徒は終始笑顔のまま授業は終了しました。

参加者の菅井吏玖(りく)さんは「初めて浴衣を着て緊張したけど勉強になった。自分の浴衣を買ってこれからも着続けたい」と、感想を話してくれました。

代表の佐藤さんは「着物文化を後世に伝えたい一心で教室を開いている」と語ります。中学校で授業を始めたきっかけは、2012年に学習指導要領が改定され、中学校家庭科の授業に浴衣の着付けなどが盛り込まれたことです。和装になじみがない教諭が増えていくことに危機感を感じ、指導役を買って出たそうです。「これからも若い人にもっと着物文化を教え続けたい」と佐藤さん。伝統文化を受け継いでいくのだという強い思いを感じました。(若生有吾)

